



みなもとのよりとも よしつね 源頼朝 はなぜ義経をたおしたの

よりとも ほうこう よしつね りかい 頼朝のめざす方向を、義経は理解していなかった

みなもとのよりとも
源頼朝 は、それまでの貴族を中心とするしくみの国にかわって、武士を中心とする新しいしくみの国を、つくろうとしました。それには、御家人(頼朝の家来になった武士)が、自分の命令にきちんと従うようにさせることで、自分の力を固め、京都の朝廷に対抗することが、必要でした。そのため、御家人が、頼朝の推せんもなしに、朝廷から官位(役職)をあたえられることを、禁止しました。ところが、1184年に京都に入った、弟の源義経は、頼朝に相談しないまま、朝廷の官位を受けてしまったのです。これは、頼朝のめざす方向に反するもので、頼朝をたいへん、おこらせてしまいました。

ごしらかわほうおう 後白河法皇のたくらみにはまった

きょうと ちょうてい ちゅうしんじんぶつ
京都の朝廷の中心人物であった、後白河法皇は、頼朝の力をおさえて、ふたたび貴族を中心とするしくみの国にもどすことを、考えていました。そこで、義経を、朝廷で出世させて、味方につけ、頼朝と戦わせようと、考えたようです。頼朝は、義経が、戦いのときの兵の使い方に、天才的な能力をもっていることを、認めていたので、後白河法皇に近づいていく義経に対して、警かい心を強めるようになりました。

おうしゅうふじわらし 奥州藤原氏が後ろについていた

よしつね よりとも ぐん さんか ひらいずみ ふじわらし
義経は、頼朝の軍に参加するまで、平泉の藤原氏のもとに、かくまわれていました。源義仲と平家をたおした頼朝にとって、次の敵は、平泉の藤原氏でした。その藤原氏の保護を受けていた義経は、今も藤原氏が後ろについている、油断できない人物であると、頼朝は思ったようです。頼朝が、義経をたおそうとしたのは、これらのことがあったからだと、いわれています。(監修・田代 脩)

